

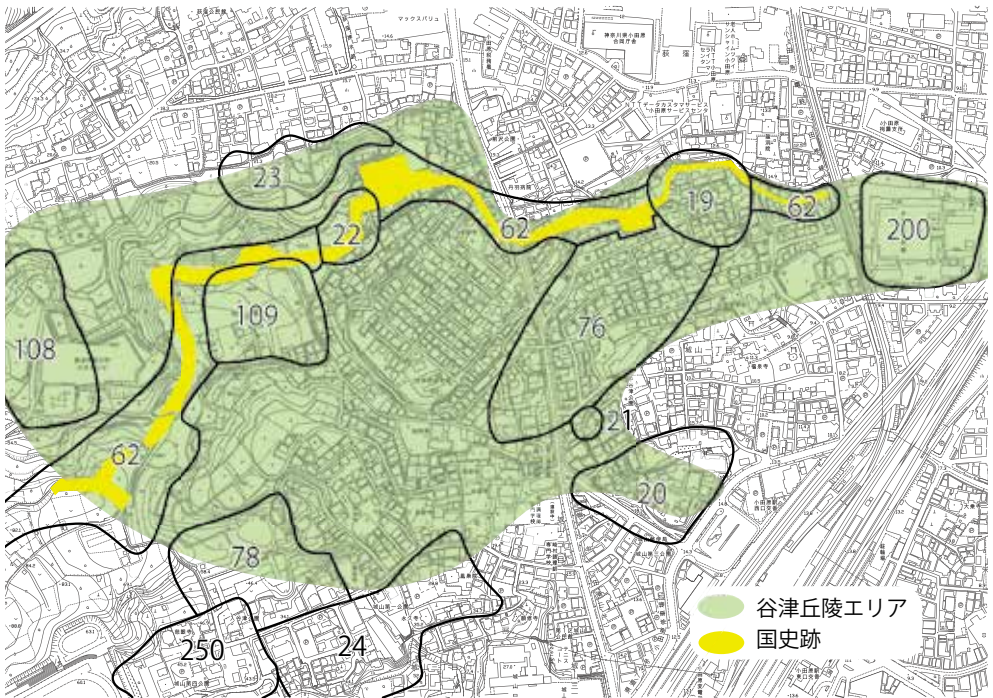
谷津周辺の遺跡

—丘陵に広がる原始・古代の遺跡—



例 言

- 1 本書は、散策しながら遺跡が学べるガイドブック「小田原の遺跡探訪シリーズ」として作成しました。今号は第14号として、小田原市谷津、城山二丁目、城山二丁目、扇町一丁目に展開する谷津丘陵周辺に所在する遺跡を取り上げました。
- 2 本書の刊行は、平成30年度国庫補助事業である「地域の特色ある埋蔵文化財活用事業」の一環として行いました。
- 3 本書の作成に関しては、以下の諸氏・諸機関からご指導・ご協力を頂きました。記して感謝申し上げます。
(敬称略・順不同)
戸田哲也・相原俊夫(株式会社玉川文化財研究所)、小池聡、國學院大學研究開発推進機構
- 4 本書の作成は、小田原市文化財課野尻夏姫が担当者となり、同課山口剛志・土屋健作・吉野文彬・土屋了介・佐野忠史が補佐し、文化部大島慎一、経済部諏訪間順の協力を得ました。



第1図 谷津丘陵と周辺の遺跡 (1/10,000)

[表紙] 谷津山神遺跡第Ⅰ地点遺跡遠景(西から)

[裏表紙] 愛宕山遺跡第Ⅱ地点出土 旧石器時代石器

I 谷津丘陵の立地と環境

1 谷津丘陵周辺の地理的環境

箱根の山から続く丘陵は、小田原城^{そうがまえ}総構の最高地点である小峯御鐘ノ台^{こみねおかねのだい}の東で、3筋の丘陵に分かれます。北から谷津丘陵、八幡山丘陵、天神山丘陵とよばれ、これまで八幡山丘陵については遺跡探訪シリーズ10、天神山丘陵についてはシリーズ9でご紹介してきました。今回は最も北の丘陵、谷津丘陵の遺跡についてご紹介します。

小峯御鐘ノ台から北東に延びる谷津丘陵は、「山ノ神台」（標高61m）の先から更に東と南東方向の二筋に分岐します。東方向へ延びる尾根はJR東海道新幹線付近まで続き、足柄平野と接しています。総構はこの尾根づたいに延びていて、JR東海道線と交わるあたりで低地に移行します。一方南東方向へ分岐した支脈は、旧社会福祉センター付近で一段低くなり^{あたごやま}愛宕山へ続き、愛宕山の東から更に延び、本来は小田原駅東口の通称「おしゃれ横丁」付近で低地に移行していたと考えられます。



写真1 小田原市役所から谷津丘陵を臨む（北から）

2 周辺の歴史的環境

谷津丘陵周辺は、旧石器時代から中世・近世にかけて各時代の遺跡が確認されている市内でも重要な地域の一つです。また、小峯御鐘ノ台から延びる谷津丘陵には、堀や土塁が造られた防衛線である総構が築られました。小峯御鐘ノ台の大堀切から尾根づたいに堀が続き、山ノ神堀切や、土塁が展開している山ノ神台東、櫓台の機能を有するとも考えられている城下張出など、戦国時代の防衛施設が良好に残っています。

谷津山神遺跡第Ⅰ地点は、山ノ神堀切と城下張出の中間点付近、谷津丘陵が東側で屈曲する手前の平坦面が幅広になったところに位置します。この平坦面のほぼ全域が遺跡の範囲となっており、平坦面の幅は100～150mの規模で、東側に向かって緩やかに傾斜しています。また、この遺跡の西から南にかけては谷津山神遺跡第Ⅱ地点が位置しており、縄文時代早・前期の土器や石器が出土しています。

山ノ神台から二筋に分岐した丘陵のうち東側に延びた尾根の付け根付近には、谷津金ノ台遺跡第Ⅱ地点が位置しており、古墳時代のガラス小玉が出土しています。その尾根づたいの東端には谷津金ノ台遺跡第Ⅰ地点が位置しており、戦国時代の硬化面が検出され、また弥生時代後期から古墳時代前期にかけての土器が多数出土しています。そして同じ尾根の北側には伊羅羅遺跡が位置しており、近世の道路状遺構や戦国時代の障子堀、弥生時代後期～古墳時代前期の土坑が検出されました。さらに尾根づたい

年代		年 代																			
		一八六八	一八五三	一七〇七	一六〇三	一五九〇	一四六七	一三三八	一一九二	七九四	七四一	七〇一	六四五	五二八	四二四	三三九	二二〇	一六〇	五〇〇	四〇〇	
												二二〇〇年前頃			一六〇〇年前			四〇〇〇年前			
近 代	近 世	中 世			古 代		古墳時代		弥生時代		縄 文 時 代		旧石器時代								
	江戸時代	安土桃山時代	室町時代	南北朝時代	鎌倉時代	平安時代	奈良時代	飛鳥時代	後期	中期	前期	後期	中期	前期	草創期	早期	中期	後期	早期	中期	
		ベリイ染織 五箇条の誓文の公布、明治改元	富士山宝木の大噴火	豊臣秀吉の小田原攻め 徳川家康、江戸幕府を開く	応仁の亂	足利尊氏、室町幕府を開く	源頼朝、征夷大将軍に任じられる	平安京へ遷都	大化の改新 大宰律令の完成 平城京へ遷都	仏教伝来 前方後円墳の築造停止	倭の五王の時代が始まる	前方後円墳の築造が始まる	卑弥呼が魏に使いを送る	穀田王、後漢光武帝より金印を受ける	鉄器や青銅器の使用が始まる	北部九州に水稲耕作が伝わる	東日本で環状集落がつくられる	気候温暖化により海面が上昇、縄文海進	定住化の進行	土器・石器の使用が始まる	細石刃が日本列島全体に広まる

表1 小田原市域の考古年表

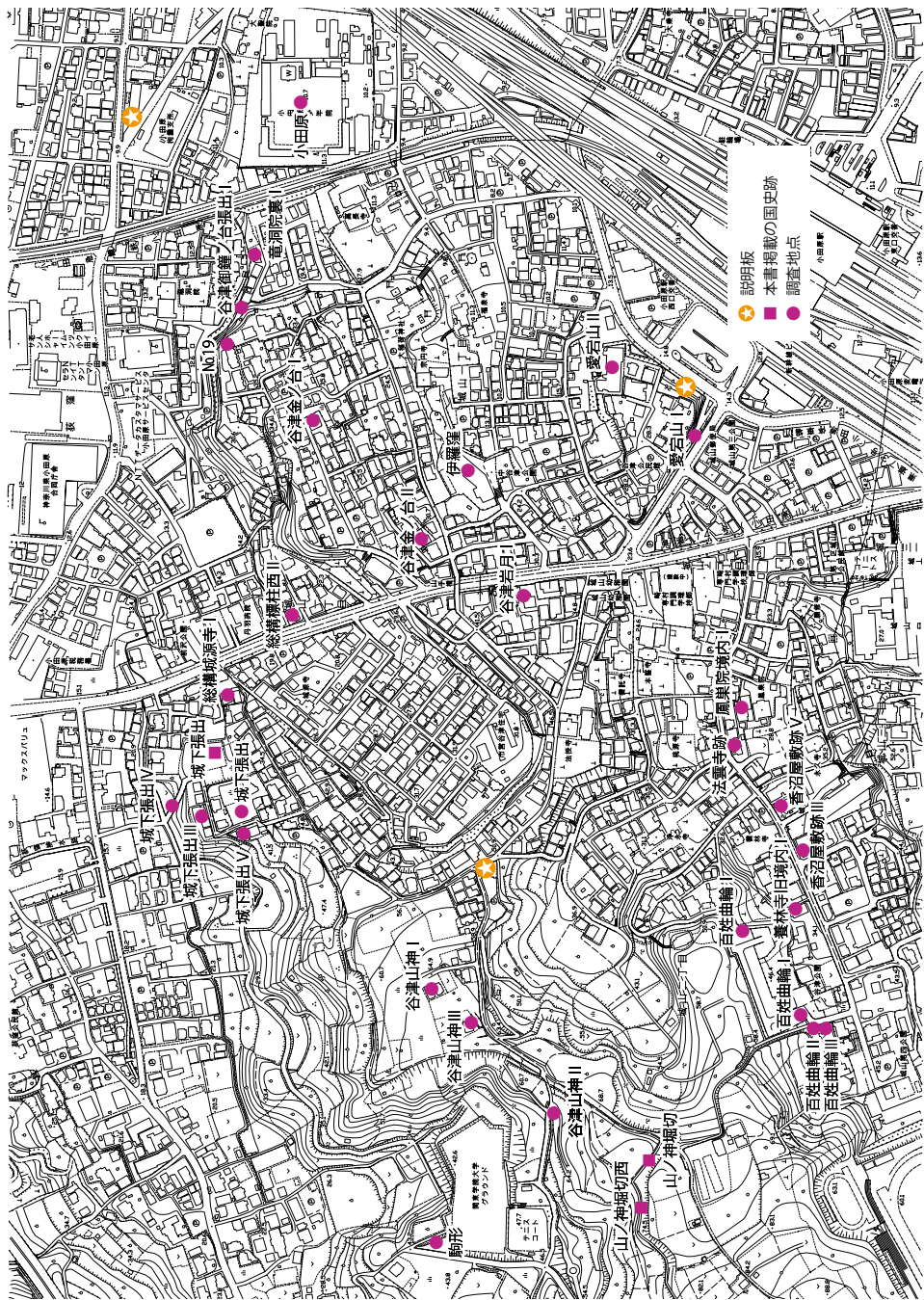
に東で、低地に移行し始める地点には、小田原遺跡が位置しています。一方で分岐から南東方向に延びた尾根の付け根付近には、谷津岩月遺跡第Ⅰ地点が位置しており、弥生時代後期のものと考えられる環濠^{かんこう}が検出されています。

南東方向に延びた尾根は、小田原駅から北へ約50mに位置する、比高差約8～9mの『愛宕山』と呼ばれる丘陵に続きます。現在はJR東海道線の開削や周辺の宅地化の進行で一見独立丘陵のように見えますが、本来は西から東へ延びる谷津丘陵の先端付近の支脈に属しています。愛宕山という名の由来は、丘陵上にかつて愛宕社や、その奥の院である摩利支天^{まりしてん}が鎮座していたためといわれています。江戸時代に編纂された『新編相模国風土記稿』によると、安国寺、愛宕社の記載があり、小田原城下を描いた正保図や嘉永図にも描かれています。これらの絵図を参考に、本来の愛宕山の姿を復元できます。愛宕山は、南側が長く北東を頂点とする平面三角形で、その東には一段低く長方形で愛宕山に抱えられたような『新蔵』の小台地があり、さらにその東の『鷹部屋』の微高地へと続きます。また愛宕山の北側の低地は西方の谷頭付近が宗円寺、福泉寺などの寺領で、東側は水田地帯でした。一方南側は斜面直下の東半部にL字形の空堀と思われる低地があり、『揚げ土』の武家屋敷地帯へと続きます。この武家屋敷地帯を東西に貫通する道路が、小田原城三の丸、谷津口門から北へ向かう道路とT字状に交差します。この東西に貫通する道路が交差する手前で北側にコの字型に小路が入り、後述の愛宕山遺跡第Ⅰ地点付近に達します。この小路は天保図には『ナヘツル小路』と記載されています。

愛宕山遺跡第Ⅰ地点では、近世以降の井戸や土橋などが検出され、また陶磁器が多数出土しました。この他に、旧石器時代の剥片も出土しています。また東側斜面末端には愛宕山遺跡第Ⅱ地点が位置しており、旧石器時代から近世にかけての遺構や遺物が検出されています。



第2図 絵図と愛宕山 (右：天保図 左：嘉永図)



第3図 谷津丘陵付近の遺跡 (1/4000)

遺跡名	内容	遺跡No.	所在	調査年月日	発出遺構	出土遺物
1 駒形遺跡	試	108	荻窪字駒形、字稲荷森	1989.06.1～09.31	縄文:集石、陥穴	縄文:土器、石器
	本			1990.04.23～07.18		
	試			1991.05.28～05.30		
2 谷津山神遺跡第I地点	本	109	谷津字山神263番2外6筆	1991.07.24～10.30	中・近世:掘立柱建物跡、溝	旧石器:石器 縄文:土器、石器 古墳:土師器 中・近世:陶磁器、かわらけ
	試					
3 谷津山神遺跡第II地点	試	109	谷津字山神297外	1994.09.26～11.02		縄文:土器、石器
4 総構城下張出	試	62	荻窪487番1	1995.11.08～11.14	中世:堀	
5 総構城下張出Ⅲ	試	2262	荻窪字市屋敷486番4	2007.11.19～11.20	中世:堀	
6 総構城下張出Ⅳ	試	62	荻窪字480番1外	2011.04.19	中世:堀・掘上げ	
7 総構城下張出Ⅴ	本	62	荻窪字486番1	2011.11.01～11.25	中世:段切の状遺構、堀掘上げ	縄文:土器 古墳:土師器
8 総構城下張出Ⅵ	試	62	荻窪字市屋敷487番3、486番17	2014.09.26	中世:堀	
9 総構城源寺Ⅰ	試	62	谷津字市屋敷227番8	2002.07.22	中世:堀	
10 総構標柱西Ⅱ	試	62	城山一丁目31番33	1997.11.28～12.04	中・近世:堀、柱穴列、土坑	中・近世:青磁、陶器、かわらけ
11 No.1 9 遺跡	試	19	城山一丁目79番3の一部外	2008.08.12	中世:堀覆土	
12 谷津御鏡/台張出Ⅰ	試	19	荻窪字柚ノ木170番口先	1995.12.13～1996.01.12	中世:堀	
13 竜洞院裏遺跡Ⅰ	試	19	荻窪字柚ノ木169番2	1986.09.04～09.10	中世:堀	
14 小田原遺跡	試	200	扇町一丁目163番22、23外	1916		弥生中:弥生土器、石器
15 谷津金/台遺跡第I地点	試	19	城山一丁目83番2、99番	1998.04.23	中世以降:硬化面、ピオ	弥生後～古墳前:弥生土器・土師器
	本	76	城山一丁目115番30	2012.05.30		
	試			2012.07.23～08.21	古墳:竪穴状遺構、土坑	弥生後～古墳前:弥生土器、土師器 古墳:土師器、ガラス小玉
17 伊羅窪遺跡	試			1996.05.08～05.28		
	本	21	城山一丁目186番1	1997.03.10～04.15	弥生後～古墳前:土坑 中世:堀、段切遺構 近世:道路状遺構、溝状遺構、段切遺構、土坑	弥生後～古墳前:弥生土器、土師器 中世:陶磁器、かわらけ 近世:陶磁器、かわらけ
	試			2006.02.28	弥生:環濠	弥生後:弥生土器
18 谷津岩月遺跡第I地点	試	76	城山二丁目3番29	1981.03.16～03.20	近世以降:井戸、土橋状遺構、溝	旧石器:石器 縄文:土器 近世以降:陶磁器、土器、瓦、石製品、鉄製品、ガラス製品
19 愛宕山遺跡第I地点	本	20	城山一丁目576番	2005.11.29		
20 愛宕山遺跡第II地点	試					
	本	20	城山一丁目450番イ外	2006.04.12～07.15	縄文:炬穴、竪穴状遺構、土坑 弥生:住居跡、土坑、環濠 奈良・平安:掘立柱建物跡 中世:掘立柱建物跡、溝 近世:溝、土坑	旧石器:石器 縄文:土器、石器 弥生:土器、石器 奈良・平安:土師器 中世:陶磁器、かわらけ 近世:陶磁器、かわらけ
	試					

表2 発掘調査地点一覧

II 丘陵上で営まれた旧石器時代の生活

1 小田原と旧石器時代研究

旧石器時代はおよそ38,000年前から16,000年前まで続いていたと考えられています。この時代の遺跡は、火を焚いた跡や陥穴^{おとしあな}などが発見されますが例が少なく、土器はまだ使われていないため、人々の生活の様子は、石器の出土状況によって知ることができます。また、旧石器時代の石器は、およそ16,000年前に火山の噴火で堆積した足柄スコリア層より下層（ローム層）から見つかります。この特徴は、他の丘陵地でも共通していて、旧石器時代の遺跡を探す重要な手がかりとなります。日本列島にもこの時代に人類が存在していたことを初めて証明しようとしたのは、イギリスの考古学者 N. G. マンロー（1863-1942）でした。マンロー氏は、早川や酒匂川の流域に堆積していた砂礫層やそれを覆う赤土（ローム層）の中から石器を採集し、これを日本初の旧石器時代の石器の発見例として紹介しました。当時はあまり注目されませんでした。60年の時を経て同志社大学の鈴木重治氏によって詳細な観察記録とともに学会に発表されました。後の研究でこの石器は、石器のように見える割れた石であることがわかりましたが、マンロー氏の研究は日本旧石器研究の先駆けとなりました。現在、小田原市域で確認されている旧石器時代の遺跡は、箱根外輪山から足柄平野へと延びる谷津丘陵や八幡山丘陵、萩窪丘陵、久野諏訪の原丘陵などの箱根東麓の丘陵先端部で6遺跡が確認されています。



写真2 谷津山神遺跡第I地点石器出土状況（北東から）

2 谷津山神遺跡第Ⅰ地点

谷津山神遺跡第Ⅰ地点では、^{ぎょうかいがん}凝灰岩製の^{れつき}礫器が15点出土しています。礫器とは、大きめの礫の一部分を打ち欠いて刃部を作ったものです。加工した刃部以外は礫の自然面が残されている最も原始的な石器で、自然面の部分を握り、対象を切る、潰すなど万能的に使用されたと考えられています。刃部の形には、先端がV字に尖ったタイプと水平なタイプの2種類がみられました（写真3）。

これらの礫器に使用された石材は、酒匂川流域で採集できます。材料となる礫には、持ちやすさを考慮してか、やや扁平もしくは幅狭で甲高なものが選ばれました。またこの遺跡からは礫器のほかに同じ石材の小さな破片が多数出土しており、これらの一部は出土した礫器と接合します。この破片は、礫器の刃部を作成した際、あるいは破損した刃部を再加工した際に生じたものと考えられます。このことから、当時の人々が酒匂川流域で石材を採集していたこと、遺跡の中では礫器を作ったり、再加工したりなどしていたことが考えられます。谷津山神遺跡第Ⅰ地点の石器は、出土した土層の様子から、18,000年前のものとして推測されます。



写真3 谷津山神遺跡第Ⅰ地点出土石器（北から）

3 愛宕山遺跡第Ⅱ地点

愛宕山遺跡第Ⅱ地点では、^{ゆうひせんとうき}安山岩製の有樋尖頭器が1点出土しています（写真4）。尖頭器とは、左右の縁を加工して先端を尖らせた石器で、刺突用であったと考えられています。「有樋」とは、先端部分が縦長の樋状に剥がされた部分を指しています。

（矢印部分）この石器の最大長は9.81cmで、相模野地で発見されている同じタイプの尖頭器と比較しても大型で精巧な作りのものです。またこのタイプの尖頭器は、相模川以西では出土例がほとんどなく、小田原では初めての発見例です。形の特徴から、23,000年前のものと考えられています。

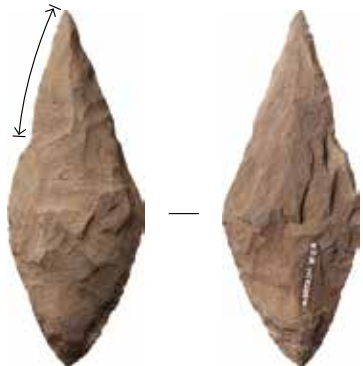


写真4 愛宕山遺跡第Ⅱ地点出土石器

Ⅲ 丘陵上で営まれた縄文時代の生活

1 縄文時代早期（7,000年前のムラ）

小田原市城山二丁目に所在する愛宕山遺跡第Ⅱ地点からは、今から約7,000年前の縄文時代早期の炉穴^{ろあな}が発見されました（写真5）。

炉穴とは、地面を掘りくぼめて火を焚いた跡で、土器を用いて煮炊きした痕跡と考えられています。写真5のように窪みの底が赤く焼けているのは、土器を置き、火を焚いたことで地面が高い温度で被熱したものです。このように複数の炉穴が掘られているのは、位置をずらしながら繰り返し作られた結果であり、愛宕山の台地上に7,000年前のムラが存在したことを示しています。

この炉穴が7,000年前に使われたものと考えられる理由として、炉穴から貝殻条痕^{かいがらじょうこん}文土器^{もんどき}が出土したことが挙げられます（写真6）。貝殻条痕文土器は今から7,000年～6,000年前に作られた土器であり、土器の内外面に貝殻で粗く引っ掻いた様な痕が付くことが特徴です。貝は、放射肋を持つハイガイやサルボウを用いるため、条痕と呼ばれる深い痕が残ります。また、この時期の土器の形は、底部の先が尖った尖底土器^{せんていどき}が作られることも特徴です。

これらの痕跡から、7,000年前の人々が地面に穴を掘り、尖底土器を支えて設置し、下から火を焚いて、貝などを煮て食料としたことが分かります。



写真5 縄文時代早期の炉穴（西から）



写真6 貝の文様がついた土器



写真7 貝を用いた文様の付けかた

2 縄文時代前期（6,000年前のムラ）

愛宕山遺跡第Ⅱ地点からは、縄文時代前期の土器も出土しています。この縄文土器は関山式土器と呼ばれており、今から約6,000年前に作られたものです。

関山式は、器の全面を縄目文様で飾る事が特徴であり、縄目にも様々な種類がみられます。中でも写真8の土器は、^{せいはん}正反の合、^{ごう}と呼ばれる特殊な撚り合わせで作られた縄の文様であり、装飾性の高い土器です。

このような関山式土器は、小田原を含む南関東を中心に分布していますが、市内では写真9のような東海地方の特徴をもつ土器（東海系土器）も見つかります。東海系土器は、器が薄く、文様は少なく、縄目を付けないことが特徴であり、箱根以西に分布が広がっています。箱根の東麓に位置する小田原は、東海地方と人や物の行き来が活発であったとみられ、東海系土器が一定量出土することが特徴です。同じような状況は、同時代に小田原市羽根尾に所在し、出土遺物が神奈川県指定文化財に指定されている羽根尾貝塚にも認められます。

今から約6,000年前は地球が温暖であり、現在よりも海水面が高く、いわゆる縄文海進と呼ばれる状況にありました。足柄平野にも湾が入り込んでおり、愛宕山の眼下にも入り江が広がっていたとみられます。6,000年前の人々は、入り江の発達した環境下で、豊かな海洋資源を積極的に利用しており、各地で貝塚が形成されました。愛宕山の人々も、目の前の豊かな資源とともに生業を営んだことでしょう。愛宕山周辺の低地には、未だ見つかっていない貝塚が眠っているかもしれません。



写真8 在地の関山式土器



写真9 東海地方の土器



写真10 正反の合で現れる縄文

Ⅳ 弥生時代から営まれた丘陵上の生活

1 愛宕山遺跡第Ⅱ地点で発見された弥生時代のムラ

弥生時代の人々は、地面を竪穴状に掘り下げた半地下式の住居を作って生活していました。これは竪穴式住居と呼ばれるもので、縄文時代から奈良・平安時代まで続いている住居形態です。愛宕山遺跡第Ⅱ地点では、弥生時代後期の竪穴住居跡が発見されました（写真11）。発見された弥生時代後期の竪穴住居跡は平面形が方形で、壁面はほぼ垂直に掘り下げられています。後世の掘立柱建物跡に壊されていて床面や炉などの痕跡は残されていませんでしたが、弥生土器の壺や甕つぼ かめが出土しました。これらは雌鹿塚式めがづかと呼ばれる東駿河周辺の土器です。イチジク形の胴部で、長くラップ状に開く口を持つ壺が特徴的です。

またこの遺跡では、弥生時代の溝状遺構も発見されました（写真12）。この溝状遺構は、北西から南東方向でほぼ直線状に延びています。溝の形状は上面の幅が最大160cm、底面の幅は最大17cm、深さが最大95cmを測る断面がV字形で、弥生土器の壺や甕、石器などが出土しました。この溝状遺構は、形態から、ムラを区画する溝である環濠と考えられています（17頁参照）。またこの環濠からは、上記の雌鹿塚式の他に、菊川式きくかわと呼ばれる静岡県の牧之原台地周辺の壺も出土しました。菊川式の壺は、首が細いイチジク形の器形で、頸部に櫛状工具くしがきもんによる刺突文しとつもんなどが巡ります。また、その下段には結び目を作った原体を転がして縄文を施す例が多く見られる弥生時代後期の土器です。当時この台地の人々の生活は、西方か



写真11 住居跡検出状況（上が北）



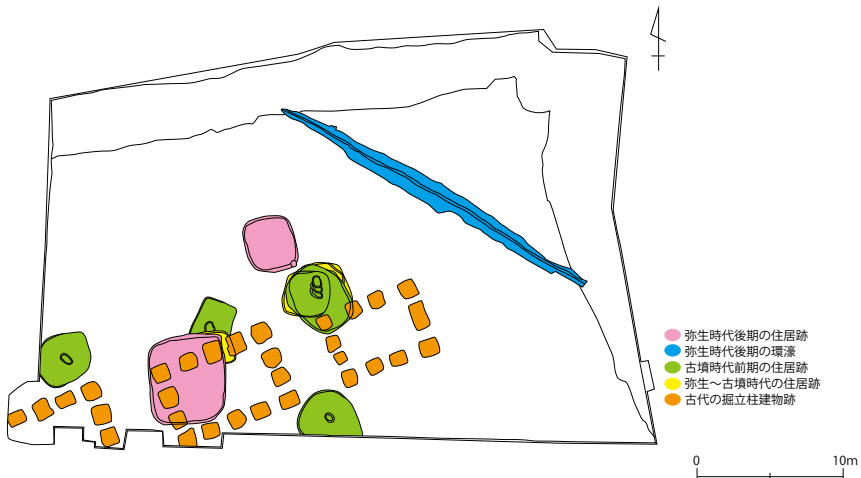
写真12 環濠と弥生土器（北西から）

らの情報や技術、人の流れに影響を受けていたことが見受けられます。

弥生時代の環濠は、初期にはより規模が大きいものが造られていました。しかし時期が降ると大規模な環濠はなくなり、溝程度の小規模なものになっていきます。愛宕山遺跡第Ⅱ地点で発見された環濠は、出土遺物と遺構の形状から後者のものと考えられています。環濠の両端は調査区外のためムラの全容は不明ですが、この延長を想定すると、愛宕山をめぐるものか、あるいは本来は南東側に延びていた丘陵先端側とムラを区画するものであった可能性が考えられています。

2 愛宕山遺跡第Ⅱ地点で発見された古墳時代前期のムラ

弥生時代後期前半に形成された環濠集落が廃絶した後、弥生時代後期後半には一時遺構は途絶えますが、古墳時代前期には再び集落が形成されました。発見された住居は平面形が方形か隅丸方形の竪穴式住居で、柱の跡や炉の跡が見つっています。炉は住居の中央付近の地面を少し掘りくぼめた中で火を焚く地床炉が作られていました。遺物は土師器の甕や壺、高坏が出土しました。これらの土師器の中には大廓式おおぐるわと呼ばれる土器が含まれています。大廓式は、丸味を強く帯びた胴部と、白っぽい色調が特徴です。また土器の材料である胎土に天城山カワゴ平から噴出した軽石を練りこんで焼いており、東駿河周辺から各地に広がったとされる土器です。特に大型の壺は、中部地方から関東全域にかけて広く分布しており、小田原もまた、この流通圏に含まれていました。



第4図 遺跡全体図

V 弥生時代研究を大きく進めた 小田原遺跡

1 新しい文様の土器、小田原式土器が示すもの

小田原遺跡から出土した弥生土器は、南関東地方における弥生土器編年の構築に大きな影響を与えました。編年とは、土器などの遺物の新旧関係を明らかにして、年代順に並べたものです。土器の文様や形は時間とともに変化していきます。考古学の研究者たちは、これらの変化の特徴を分析したり比較したりして、考古学における時間のものさしを作ってきました。後述する杉原荘介氏（1913-1983）もその一人です。

小田原遺跡は、明治36年（1903）に横浜刑務所分監（現在の小田原少年院跡地）の建設工事中に発見され、大正時代には柴田常恵氏（1877-1954）をはじめとする数名の研究者によって調査が行われました。その結果、多くの弥生土器の壺や甕の破片、石器が発見されました。これらの遺物については、昭和11年（1936）、のちに明治大学教授となる杉原荘介氏が、土器の写真とともに詳細な観察所見をまとめ、「相模小田原出土の弥生式土器に就いて」として学会に発表しました。杉原氏はまず、小田原遺跡から出土した土器の文様に注目し、櫛描文に富む土器と、縄目文様に富む土器



写真13 小田原遺跡調査風景（1919.8.31）
（國學院大學研究開発推進機構 提供）

略年代	a	前400	前300	前200	前100	1	100	200	250										
	b	前300	前200	前100			1	100		200									
時代 時期区分		弥生時代前期				弥生時代中期			弥生時代後期		古墳時代								
		I		II		III		IV		V		VI							
		後半		前葉	中葉		後葉		初頭	前半	後半	末							
主な土器型式		矢頭	堂山	三ヶ木	平沢	中里	宮ノ台			久ヶ原	弥生町	前野町	〔東京湾〕						
										朝光寺原	(相模)		〔鶴見川上流〕						
小田原の遺跡		府川諏訪の前	前川山王前	府川諏訪の前		中里	香沼屋敷跡	久野多古境	小田原	久野山神下	国府津三ツ俣	羽根尾塚ノ上		八幡山遺構群(埴輪)					
										愛宕山II	酒匂北川端	千代吉添	千代南原刈	千代仲ノ町VI	府川諏訪ノ前III	千代南原IV	久野下馬道ノ上	国府津三ツ俣IV	永塚下り畑IV

表3 弥生時代の変遷 『弥生時代のかながわ』神奈川県教育委員会より引用一部改変

の二種類に分けました。当時の理解として、櫛描文は伊勢湾以西の土器の特徴とされてきました。杉原氏は、小田原遺跡の二種類の土器は、この伊勢湾以西から伝わってきた土器と、その土器が縄文土器の影響を受けて南関東地方独自の弥生土器へと変化した土器であると考え、前者を『小田原式前期』、後者を『小田原式後期』としました。この発表が、南関東地方独自の縄目文様に富む弥生土器への理解を深め、弥生土器研究を発展させるきっかけとなりました。さらに杉原氏は、小田原遺跡が西方の土器の特徴を関東に伝える中継地点であったとも考えました。そして『小田原式後期』とした南関東地方独自の弥生土器が関東地方全域へと広がっていく期間を『小田原期』と位置づけることを提唱したのです。

その後様々な研究が積み重ねられ、他地域も含めた新しい編年が構築されると、小田原式土器の概念はほとんど使われなくなっていきます。現在の編年研究では、小田原式は弥生時代中期後葉の宮ノ台式土器の古手の部分に含まれています（第3表）。

現在、少年院や周辺の宅地化が進んだことにより、小田原遺跡の面影は影を潜めています。弥生時代の研究を進めるきっかけとなった土器は、東京大学の総合研究博物館に保管されています。



写真14 小田原遺跡出土土器（國學院大學研究開発推進機構 提供）



駒形遺跡

関東学院大学グラウンド

小田原警察署

山ノ神堀切西

山ノ神堀切

谷津山神遺跡

城下張出

小田原合同庁舎

丘陵上で営まれた
旧石器時代の生活

総構

弥生時代研究を大きく
進めた小田原遺跡

百姓曲輪

谷津金ノ台遺跡

谷津岩月遺跡

伊羅窪遺跡

小田原少年院跡地

小田原遺跡

小田原高校

愛宕山遺跡

城山中学校

丘陵から相模湾
を臨む倉庫群

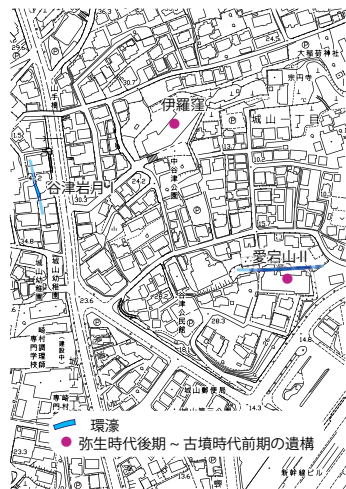
小田原駅

谷津丘陵周辺
散策マップ

VI ムラを区画した溝（弥生時代後期）

1 谷津岩月遺跡第I地点で発見された環濠

谷津岩月遺跡第I地点は、谷津丘陵の先端部にある平坦面に立地しています。この遺跡では、環濠と呼ばれる大型の溝状遺構が発見されました（写真15）。環濠とは、水稻農耕とともに大陸から伝わってきた集落の境界施設です。弥生時代になり稲作を行うようになると、人々はそれまでの狩猟採集を中心とした移住生活をやめて、決まった土地に定住するようになります。稲作が社会に定着すると、その土地の支配者が現われ、領土や水を巡ってのムラ同士の争いなどが起こるようになり、自分たちのムラを守るための防御施設が必要となりました。そこで築かれたのが環濠と考えられています。その環濠で囲まれた集落を環濠集落と呼んでおり、神奈川県内では、横浜市の大塚遺跡（弥生時代中期）、綾瀬市の神崎遺跡（弥生時代後期）などが挙げられ、小田原市内では、中里遺跡で弥生時代後期の環濠と平地式住居が見つかっています。谷津岩月遺跡第I地点で発見された環濠は、上面



第5図 環濠とムラの広がり



写真15 環濠の土層断面の様子（南から）

の幅が170cm以上、底面の幅が15cm、深さが150cmを測る断面がV字形の溝です。環濠の法面は約60度傾斜していて、表面は平滑に造られています。環濠からは、弥生時代後期～古墳時代前期の壺や甕が出土しました（写真17）。壺は、口の先端部が折り返された口縁部や、赤く塗られたのち、ヘラ状工具などで光沢が出るようミガキが施された胴部、土器を作るときに底に敷かれた草木の葉の痕が残っている底部などが出土しました。甕は、角材の小口などで削られ櫛状の痕が付いた口縁部や、草木の葉の痕が残っている底部が出土しました。環濠は南北に延びており、緩やかに湾曲しています。現地の地形や湾曲の方向などから、環濠は谷津丘陵の等高線に沿って造られており、環濠の西側の丘陵上に集落が展開していた可能性が考えられます。

谷津岩月遺跡第Ⅰ地点の周辺では、北東側に約120mの地点に伊羅窪遺跡第Ⅰ地点があり、弥生時代から古墳時代の土坑が見つかっています。住居跡などは確認されていませんが、今後の周辺の調査で集落の痕跡が明らかになるかもしれません。また、東側の丘陵先端部付近に立地している愛宕山第Ⅱ地点でも弥生時代後期の環濠と竪穴住居跡が発見されており、本遺跡の環濠との関連が注目されます（第5図）。



写真16 環濠が確認された様子
(中央の黒い部分) (西から)



写真17 トレンチ出土遺物

Ⅶ 丘陵の古墳に葬られた有力者

1 谷津に広がる古墳群

古墳時代になると、日本列島で有力者が台頭し、それぞれの地域を支配するようになりました。そしてその有力者が亡くなると、古墳を築き、遺体を埋葬しました。古墳が築かれる場所は時期によって異なりますが、見晴らしの良い高台が好まれました。谷津丘陵の古墳は、いずれも規模は不明ですが、過去の調査成果や伝承から、後述の本調査地点とその南東には円墳の存在が推測されます。

2 谷津金ノ台遺跡第Ⅱ地点で発見された埋葬施設

谷津丘陵の東側に延びた尾根の付け根付近に立地する谷津金ノ台遺跡第Ⅱ地点では、1基の竪穴状遺構と44基の土坑が検出されました（写真18）。このうちの1基の土坑から、ガラス製の小玉が9点出土しました（写真19・20）。この土坑は、長軸2m以上、短軸約70cm、深さ30cmの平面長方形、断面箱形で、遺体が埋葬された主体部であったと考えられています。出土したガラス小玉は、被葬者の副葬品であったと考えられています。

ガラス小玉はいずれも半透明の淡い青色をしており、ものによって青味が強かったり緑掛かったりしています。

外径が2.9～5.1mm、厚さが2.7～4.1mm、孔径が0.8～2.1mmと数値に幅があり、扁平なものや、厚みのある管状のものがあります。小玉の制作技法には、引き伸ばし法・巻き付け法・鋳型法の3種があります。それぞれの技法によって出来上がる製品は類似していますが、小玉の中に残された気泡や混在物の流



第6図 古墳の分布



写真18 谷津金ノ台遺跡第Ⅱ地点全景（東から）

れによってその成形技法がわかります。先述の谷津金ノ台遺跡第Ⅱ地点で出土したガラス小玉は、引き伸ばし法によって制作されたと考えられます。引き伸ばし法は、孔となる軸に素材を巻き付けたあと、細長くなるよう引き伸ばして成形し、それを小玉の幅に切っていく技法です。古墳時代前期以前の引き伸ばし法によって制作されたガラス小玉は、管から切り離れた端面が研磨されず切りっぱなしのものが多い一方で、古墳時代中期では、端面を丁寧に研磨するようになります。出土したガラス小玉は後者と考えられています。



写真19 出土したガラス小玉



写真20 ガラス小玉の出土状況

3 遺跡から出土するガラス

国内で最も古いガラス製品の出土例は、西日本では九州北部、東日本では青森県つがる市の亀ヶ岡遺跡のものが挙げられます。出土したのはガラス製の小玉で、弥生時代の始め頃のものと考えられています。これらの遺跡のガラス製小玉をはじめ、国内で出土するガラス製品の多くはどこで作られたものなのかははっきりとはわかっていませんが、ガラスの素材に含まれる鉱物などの原料が重要な手がかりとなります。そのガラスの原料がどこで採れるのかを調べ、国内に持ち込まれたガラスの生産地を明らかにする研究が進められています。ガラスの素材にはカリガラス・ソーダガラス・植物灰ガラス・鉛ガラスなどがあります。これらは、製品の製作方法や、使用目的によって選択したと考えられています。また鉱物によって様々に着色されます。鉱物の成分によってその発色が異なり、深い青色にはコバルト、淡い青や緑には銅、黄色には鉛、黒や紫にはマンガン、赤色には酸化銅が使われ、混合して着色したのもの見られます。コバルトは日本では採れないため、この産地もまたガラス製品の流通ルートを探るヒントになると考えられます。

VIII 丘陵から相模湾を臨む古代の倉庫群

1 愛宕山遺跡第Ⅱ地点で発見された掘立柱建物跡

愛宕山遺跡第Ⅱ地点では、これまで述べてきた通り、旧石器時代から近世にかけて断続的に続く人々の生活の痕跡が発見されています（写真21）。古代の調査では、大規模な掘立柱建物跡が発見され、注目されます（写真22）。掘立柱建物とは、主柱を地面に開けた穴に直接立てて建築した木造の建物です。発掘調査では、見つかった穴が柱の穴かどうかの識別は容易ではなく、発見された穴の大きさや配列によって判断することになります。穴がほぼ同じ規模で、均等な間隔で正方形あるいは長方形で並んでいた場合などは、掘立柱建物跡の可能性があると考えられます。また遺跡によっては、穴の底面で柱が当たっていた部分が硬化していたり、柱の沈下を防ぐための根石が見つかったり、また木材そのものが出土する例もあります。これらの場合は、柱を立てるための穴であった可能性がより高いと判断できます。愛宕山遺跡第Ⅱ地点の柱の穴は、根石や木材はありませんでしたが、穴の形や大きさ、配列の規格が整えられていました。

愛宕山遺跡第Ⅱ地点では、3棟の掘立柱建物跡が発見されました。発見された柱の穴は、いずれも1辺1～1.4mの方形で、深さは60～100cmの間で整えられています。これらの建物は、3棟とも建物の外側だけに柱を立てる側柱式です。建物の規模は、



写真21 愛宕山遺跡第Ⅱ地点全景（東から）

はりゆき^{はりゆき} 榊行^{けたゆき}（建物の短手）と榊行^{けたゆき}（建物の長手）の柱の間の数で表します。そうすると、東端の建物は梁行3間（4.2m）×榊行3間（6.3m）、中央の建物は梁行3間（5.1m）×榊行4間（7.5m）となり、西端の建物は調査区外のため全容は不明ですが、少なくとも梁行2間（1.8m）×榊行3間（1.95m）はあったことがわかっています。また、用途は不明ですが、東端の建物の東側と中央の建物の西側の柱の穴が溝状の掘り込みで連結されており、注目されています。さらに柱の穴の形や土の堆積の様子に共通の特徴があり、建物の建て方や廃絶の様子の一部が復元できます。これらの建物は、方形に壺掘りされた穴に柱を立て、その周りを版築状^{はんちくじょう}につき固めて柱を立てたと考えられます。そして、すべての建物で柱が抜き取られている痕跡が確認できたことから、これらの建物は同時期に機能し、そして同時に廃絶した可能性が高いと考えられます。

また、3棟の建物の軸と規模の関係にも特徴があります。東端と中央の建物の南側の柱の穴は一直線にそろっています。一方北側の柱の穴の列を比べると、東から西にかけてほぼ等間隔で北にずれていきます。西端の建物の南側の柱の穴も他の2棟の建物と同じ一直線にそろっていたとすると、これら3棟の建物は西にいくほど大型の建物であった可能性が考えられます。

発見された掘立柱建物跡は、時期を決定づける土器などの遺物が出土していないので、いつ頃建てられたものなのかは特定が困難です。しかし、柱の穴が方形で大型であること、建物の配置に計画性が窺えることなどから、法制が整えられた律令期（7世紀後半～10世紀頃）に建てられた役所関連の建物であることが想定されています。文献史学の研究によると、足柄評の役所である評家が小田原市街地の北部にあったとする見解もあり、当時の有力者が所有していた倉庫群が、この愛宕山に展開していたのかもしれない。



写真22 掘立柱建物全景（上が北）

IX 丘陵上に築かれた中世の堀

1 小田原城総構

明応5年(1496)から文亀元年(1501)の間に、伊勢宗瑞(北条早雲)は大森氏を攻略し、以後小田原城を拠点に関東地方での支配を始めました。小田原北条氏は五代およそ100年にわたってこの城を包囲する大規模な堀や土塁を巡らせ、壮大な総構を造り上げました。総構は天正18年(1590)の小田原合戦にいたる頃には、周囲およそ9kmに及び、城下町をも囲い込む規模へと発展していきました。その範囲は、中央は八幡山丘陵、南側は天神山丘陵の三筋の尾根、東側は山王川流域から南西部の早川沿岸まで、そして北側は谷津丘陵まで延び、その内側の面積は約3.48km²に達しました。小峯御鐘ノ台の北側から延びる谷津丘陵の北斜面には、戦国時代から小田原を守ってきた総構の土塁、空堀が良好に残っています。

2 山ノ神堀切

山ノ神堀切は、谷津丘陵を東西に分断している、北側で総構の堀と接続します(写真23)。全長は50m、堀幅は7mほどで北にかけて広がっており、総構との接続部では11mになります。堀切とは、尾根を断ち切るように造られた堀のことを指します。山城で行われる戦いでは、尾根伝いに敵陣に攻め込むことが基本の一つになるので、それを防ぐ重要な施設です。



写真23 山ノ神堀切(南から)

3 山ノ神堀切西

総構のうち、山ノ神堀切の西側で接続している部分です(写真24)。堀の南側は、丘陵の斜面を削って法面を造り出し、上面には土塁を築きました。一方北側は、堀を掘削した土を搔上げて搔上土塁を築きました。搔上土塁は南側の土塁ほど高いものではありませんが、工事に割く労力を節約できる上、北側から丘陵の斜面を



写真24 山ノ神堀切西(東から)

登って攻めてくる敵に対しては障害となり、南側の土塁上からの射程範囲も確保されるという、攻守共に効果的な仕組みでした。小田原北条氏は地形を巧みに利用し、最低限の労力で戦国期最大の総構を造り上げていきました。

3 城下張出^{しろしたはりだし}

東西に50m、南北に45mほど北に張り出している施設で、平場が雛壇状に展開しています。丘陵を登って攻めてくる敵に対して横方向から攻撃をしかける横矢掛^{よこやがかり}ができる構造になっていると考えられています。

平成7年（1995）試掘調査の城下張出第Ⅲ地点で堀の東側法面、平成19年（2007）試掘調査の城下張出第Ⅳ地点で堀の北側法面が確認されています。



第7図 総構の仕組み模式図



写真25 城下張出全景（西から）



第8図 小田原の丘陵と総構の位置

時代区分		主 な で き ご と	本書に登場する事柄	
旧石器時代		箱根火山の爆発的噴火		65000 年前
	後期 草創期	細石刃が日本列島全体に広まる 土器・石鏃の使用が始まる	谷津山神遺跡Ⅰ地点の礫器 愛宕山遺跡Ⅱ地点の尖頭器	16000 年前
縄文時代	早期	定住化の進行 気候温暖化による海水面上昇（縄文海進）	愛宕山遺跡Ⅱ地点の炉穴 愛宕山遺跡Ⅱ地点の縄文土器	15000 年前
	前期	羽根尾貝塚がつくられる		5500 年前
	中期	東日本で環状集落がつくられる 久野一本松遺跡の環状集落		
	後期	祭祀具の発達		4500 年前
	晩期 前期	水稲耕作の本格的な開始		
	中期	中里遺跡の出現 奴国王、後漢光武帝より金印を受ける	小田原遺跡の弥生土器 愛宕山遺跡Ⅱ地点の住居跡と環濠 谷津岩月遺跡Ⅱ地点の環濠 愛宕山遺跡Ⅱ地点の住居跡	西暦 57
弥生時代	後期 前期	前方後円墳の築造開始		
	中期		谷津金ノ台遺跡Ⅱ地点のガラス小玉	
	後期	仏教伝来 久野古墳群		西暦 538
	飛鳥時代	大化の改新 千代寺院跡の造営	愛宕山遺跡Ⅱ地点の倉庫群	西暦 645
古代	奈良時代	平城京へ遷都		西暦 710
	平安時代	平安京へ遷都		西暦 794
	鎌倉時代 南北朝時代 室町時代	源頼朝が征夷大將軍に任じられる		西暦 1192
中世	安土桃山時代	小田原城が築城される 小田原城総構の完成 豊臣秀吉の小田原攻め	小田原城総構山ノ神堀切 〃 山ノ神堀切西 〃 城下張出	西暦 1590
	江戸時代	江戸幕府が開かれる 富士山宝永の大噴火 ペリー来航		西暦 1707 西暦 1853
近・現代	明治 大正	明治改元、五箇条の誓文の公布		西暦 1868
	昭和 平成	太平洋戦争終結		西暦 1945

文 献

本書を作成するにあたり、引用または参考にした主な文献を掲載しました。谷津の遺跡をさらに詳しく知りたい方は、参考にしてください。

- 塚田順正ほか 1989 『愛宕山』 小田原市文化財調査報告書第27集
- 山口剛志ほか 2003 『谷津山神遺跡第Ⅱ地点』 小田原市文化財調査報告書第108集
- 小田原市教育委員会 2010 『史跡小田原城八幡山古郭・総構保存管理計画策定報告書』
- 小池 聡ほか 2010 『愛宕山遺跡第Ⅱ地点』 株式会社盤古堂
- 土屋了介ほか 2013 『平成25年小田原市遺跡調査発表会発表要旨』
- 諏訪間順ほか 2014 『いにしへの小田原』 平成26年度小田原城天守閣特別展 小田原城天守閣
- 渡辺千尋ほか 2017 『平成18年度試掘調査』 小田原市文化財調査報告書第181集

小田原の遺跡探訪シリーズ14

谷津周辺の遺跡

—丘陵に広がる原始・古代の遺跡—

平成31年3月15日 印刷

平成31年3月22日 発行

編集 小田原市教育委員会

発行 〒250-8555 小田原市荻窪300番地

電話 0465-33-1715

<http://www.city.odawara.kanagawa.jp>

E-mail: bunkazai@city.odawara.kanagawa.jp

印刷 有限会社 石橋印刷

